

〔資料紹介〕

養鷗徹底と金嘉穂の明治四年、長崎における筆談記録

町 泉寿郎

解題

ここに紹介する『瓊浦筆談』は、明治三年十二月から明治四年正月にかけて長崎における養鷗徹底と金嘉穂の筆談記録である(図1)。

金嘉穂は、道光十四年(一八三四)蘇州に生まれ、名は嘉穂、字は幽懷・邠、別号に蘆庵・蘆園・芷園・尊古自牧・邠居・曹門・主客説詩堂等がある。書画・金石学に通じた。太平天国の乱を避け、妻を蘇州に残して、新興の経済都市上海に住んで書画によって生計を立てた、いわゆる海上派文人と目すべき人物である。明治三年頃、赤松某とともに長崎に來船し、明治四年正月下旬に名古屋藩の招聘に応じ、翌五年三月頃まで同藩士に教授した。名古屋藩招聘にあたっては、岡田篁所が尽力したとも言われる(『滬呉日記』)。

従来、金嘉穂の名は、神田喜一郎『墨林間話』(岩波書店、一九七七)に言及があり、鶴田武良氏の「金邠について―來船画人研究―」(『美術研究』三一四、一九八〇)の先行研究もあって、全くの未聞に属するとはいえないが、関連資料が乏しいことに起因して、その具体的な活動に言及した研究はまだまだ少なく、先行文献の一部には誤った記述も見られる²⁾。

養鷗徹底は幕末明治期(一八一四〜九一、久留米出身、知恩院住職・浄土宗管長等を歴任)の浄土宗の高僧として生前から著名な人物であり、数種におよぶ伝記が備わり、特にその耶蘇教批判の言論活動や収集した古写経に基づく仏典の文献研究への貢献は広く知られ、それらに関する論考も少なくない³⁾。しかしながら、金嘉穂との交流については伝記・年譜にも欠落して⁴⁾いて、殆ど知られていない。

翻刻の底本は、石川県白山市立松任図書館の松本白華文庫に所蔵され、徹底の遺稿類(仏教大学図書館所蔵『古経堂詩文鈔

草稿』十三冊)にも見いだされず、管見の限りこれが唯一の伝本である。養鷗徹定と松本白華は、教部省時代(一八七二―七)に徹定が教導職、白華が官吏として交流があり、その縁で本書が白華の蔵書に加えられたと考えられる。明治五年からは小栗栖香頂らによる東本願寺の清国開教が開始されており、のち明治十年から彼自身が上海の別院を拠点に開教に従事する白華にとって、本書は清国事情としても一定の価値を有したと考えられる。

次に、書誌について記せば、本書は写本一冊、半紙本袋綴じ、全五十一葉。装釘は四穴を上下二箇所紙縫をもちいて仮綴じにしている。共紙表紙には左肩に本文と同筆の打付け書で外題「瓊浦筆談 一」と、中央上部にもとの函架を示すと見られる「帝」字を記した紙片と「6814/2331」と記した図書ラベルを貼付している。巻首に内題「瓊浦筆談」、その次行に記した「松翁道人録」は養鷗徹定の別号である。本文は、無罫の和紙に毎半葉多くは八行、まれに七行・九行に記され、一行の字数は不定で、徹定の文を低一格にして記し、金嘉穂の行頭から記した文と区別している。巻末に明治四年二月十二日の崇禪による「書瓊浦筆談後」を置く。蔵書印は「加之／松任／梅花堂／水草庵／之主人」(表紙右肩)、「仙露閣／図書記」(内題下)、「石川郡松任東町／第二十番本誓寺境内／仙露閣記」(書後題下)を鈐し、何れも松本白華の使用印である。本文を墨書

した後に、朱筆で句読・返り点・送り仮名と、筆談者を区別するための△□印(△徹定、□金嘉穂)を文頭に加えているが、返り点・送り仮名・△□印は部分的である。書写奥書等はない。

次に本書の成立について記す。徹定の高弟・相馬崇禪(一八二九―八八)⁵⁾の撰文にかかる「書後」によれば、徹定はこの前年の明治三年九月から十一月にかけて周防の浄土宗学校において都講を勤めた後、十二月に長崎大音寺に転じて「華嚴原人論」と契嵩「輔教編」を講じ、その余暇に偶々同地に滞在中の金嘉穂と出會って詩文を唱和し、それを筆談録二巻にまとめた。正月二十八日に長崎の徹定から郵致された筆談録の原本は、東京芝の増上寺の崇禪のもとに二月八日に到着し、崇禪は早速、筆工に一本を謄写させて知友に評を請うたという。一方、白華文庫写本の二十五葉末には「已上前冊」の朱筆書き入れがあることから、その底本は二冊本であったことが分かる。したがって、筆談録原本は二巻二冊であったと考えられる。

本書中の金嘉穂の序跋や詩文の末には、もと印款が鈐されていたと思しい位置に□が記されている。また古写経に寄せられた金嘉穂の跋は、それぞれの古写経の巻末に附載されていることが知られている。さらに「釈教正謬初破序」のように、刊本『釈教正謬初破』所収の金嘉穂自筆版下と字詰めが一致している例がある⁶⁾。金嘉穂が筆談録作成のためにいちいち自撰の詩文

を書写し直したとは考えにくく、また右のような版下との字詰めの一致から考えても、崇禎に郵致された原本は、筆談時の草稿や金嘉穂自筆序跋等の一次資料から、徹定が冊子本に編集したものと推定される。

筆談録の概要について記す。その発端は、明治三年十二月二十四日、徹定が鉄翁禅師を春徳寺に訪ねたとき、鉄翁禅師は金嘉穂から贈られた詩を示して徹定に金嘉穂を紹介し、徹定が七絶を金嘉穂に贈って来会を求めたことにはじまる。⁷⁾その後、明治三年十二月二十八日、明治四年正月三日、正月十一日、正月十三日、正月十六日、正月二十二日の六回にわたって徹定と金嘉穂は面会筆談した。年齢では金嘉穂は徹定より二十歳若年で、明治四年には徹定五十八歳、金嘉穂三十八歳である。

初見時は（明治三年十二月二十八日、翻刻2オ〜8オ）、徹定が金嘉穂のもとを訪問した。徹定はまず自著『釈教正謬初破』を示して斧正を請い、清朝の耶蘇教政策を問うた。金嘉穂は儒釈道について一通り見解を述べ、耶蘇教に対する否定的見解を表明し耶蘇教については取り立てて弁駁するまでもないと、長文を草して回答した（3ウ〜4ウ）。これによって徹定は金嘉穂の学問識見を信頼したと見られ、次に数種の古写経を金嘉穂に示して跋を請うた。この時の古写経は、『大樓炭経』『海龍王経』『菩薩処胎経』⁸⁾であったと考えられる。直ちに貴重

な文献であることを見て取った金嘉穂は、草卒に撰文することを避け、数日預かって撰文することを約した。また天津の事変について応酬があった。金嘉穂からは架蔵する元版『翻訳名義集』に缺巻があるので、徹定蔵本による補写を請うた。最後に五律二首と蘭竹画が金嘉穂から徹定に贈られた。

再見時（明治四年正月三日、8オ〜18オ）は、金嘉穂が徹定を恐らくその寓房とした大音寺に訪うた。金嘉穂は撰文した「釈教正謬初破序」（12オ〜14オ）、「大樓炭経跋」（14ウ〜15ウ）、「海龍王経跋」（15ウ〜17オ）を贈り、『菩薩処胎経』『大樓炭経』『海龍王経』をこれまで見た「奇蹟妙墨のうちの第一」（16ウ）であると称揚した。徹定が揮毫用として金嘉穂に贈った用箋は薄手の中国紙であったが、金嘉穂は古写経の厚手の用箋に附す跋文の用箋としてこれは不適當であり、和紙の方がよいと述べたので、徹定は明日送寄することを約した（11ウ）。

徹定は著名文人の消息や西湖・蘇州の現況について質問し、金嘉穂は何紹基（一七九九〜一八七三）や宋元の名蹟を鑑蔵する蘇州の顧某をあげ、また徹定の知人らしい清人馮鏡如・林雲達⁹⁾の近況について回答し、太平天国の乱によって残毀した名勝の様子を伝えた（8ウ〜10ウ）。蘇州の顧某については、前掲の鶴田論文に岡田篁所『滬吳日記』から引用して金嘉穂の親族として蘇州の顧氏をあげ、顧広圻との関連を推測しているのが想起される。

三見に先立って、正月四日、正月五日、正月六日、正月十日には書翰による応答が行われた。正月四日の徹定の書翰では(18オ・19オ)、初めて秘蔵の古写経を鑑賞してくれる人物に巡り会ったことへの感謝が述べられ、更に日本の古写経五卷(『心経』『華嚴経』『時非時経』『続華嚴経疏』)を送寄して跋を請うた。同日の金嘉穂の返書からは(19オ・19ウ)、初見時に金嘉穂から缺本を補写するために借覧を請われていた『翻訳名義集』が、日本古写経とともに送られたことがわかる。この日、徹定から跋文用に二種の和紙が贈られてその可否が問われ、金嘉穂の序跋(「釈教正謬初破序」「樓炭経跋」「海龍王経跋」)に使用されている古体字に関する質疑があり、金嘉穂は直ちにそれに回答した。併せて、『菩薩処胎経』巻尾に加えた跋の用箋に筆写年時を書く余白がないので、紙を一枚継ぎ足してほしいとの依頼があった(20オ・ウ)。また、金嘉穂から除夜に作った七絶二種が贈られ(20ウ)、徹定からは初見時の金嘉穂の作に次韻した五律二種が贈られた(21オ)。

正月五日の応酬では、前日の依頼に応じて行った『菩薩処胎経』巻尾に紙を継ぎ足す作業が上手くいかなかったため、徹定は書き直してほしいと申し出た(21ウ)。また、徹定から金嘉穂の除夜作に次韻した七絶二種を含む詩が贈られた。金嘉穂からは書翰とともに文稿『自牧斎稿』二巻が送寄された(21ウ・22オ)。

正月六日、徹定は書翰のなかで『自牧斎稿』について、「其詩則有陸劍南之体、灑落嫺雅、奇巧驚人。其文則有大蘇之風、变化縦横、不可端倪。」と称賛し、「読金剛経序」「法苑珠林詩」等の仏教に関わる詩文を取り上げて「真可謂有道之士矣」と評価し、七絶二首を贈った(23オ・24ウ)。更に、『自牧斎稿』から省字の用例を抄出して自ら当てた通行字の当否を問い、併せて日本の古仏経疏の省字例をあげ中国での用例の有無を質問した(24ウ・25ウ)。

こうした応酬を受けて、三見時(正月十一日)、場所は恐らく大音寺であろう、金嘉穂から定稿「菩薩処胎経跋」が贈られた(26オ・28オ)。同書に使用されている別体字約五十例を挙げて、その書体筆勢が北魏の碑刻体と一致することが述べられ、本書が紛れもない西魏写本であることを審定し、徹定の跋文に本書を直ちに西魏写本とせず、その当時のものかも知れないと疑問の余地を残したのは、徹定が日本に生まれて、北朝の碑刻体を見たことがなかったからであると指摘している。

また金嘉穂は、初見時に贈った五律二首を失念したので書いてほしい旨の書翰と(正月九日送、28オ・ウ)、前日徹定から贈られた詩に次韻した七絶二首(28ウ)と五律二首を贈った(29オ・ウ)。

徹定は、金嘉穂使用印の刻字について問い、また清国文人の近著について尋ね、金嘉穂は王昶『湖海詩伝』『湖海文伝』を

推薦した。金嘉穂は昨日『曝書亭集』を購入したといい、長崎新地の書店での舶載書購入を徹定に薦めている(30オ～31オ)。

この日は十三日の午後に徹定が金嘉穂を訪問することを約して終わった(32オ)。

別離の日が迫るなか、徹定が金嘉穂を訪ねた四見時(正月十三日)、徹定は当年九月に江戸に帰る途中、尾張に立ち寄り浄土宗建中寺を寓房とする予定であることを伝え、その時に再会を約したいと申し出、金嘉穂もこれを諾した(33オ¹⁰)。金嘉穂は、元刊『翻訳名義集』を徹定に示して跋文を依頼し、その資料価値について徹定に説明した。徹定は自著『釈教正謬再破』序の撰文を依頼し、金嘉穂はこれを諾した。また金嘉穂は来航以来、俗人からの揮毫依頼が多くて困却していると不満を述べ、岡田篁所に聴いて潤筆料を取ることにしたが、その価格が適正かどうかと徹定に質している(33ウ～35ウ)。

正月十五日には互いに書翰と跋文を交換した。徹定は「書元槧翻訳名義集後」(40オ～41オ)を贈り、金嘉穂は「心経(跋)」
「華嚴経跋」「時非時経跋」「続華嚴経疏跋」(36ウ～38ウ)、「元槧梵本翻訳名義集(跋)」(39オ・ウ)を贈った。

五見時(正月十六日)には、金嘉穂から「釈教正謬再破序」が贈られ(45ウ～46ウ)、『釈教正謬再破』をめくって金嘉穂と徹定の間に質疑応答があった。金嘉穂は十四、十五の両日、『釈教正謬再破』を筆写して複本を作り、内容を十分に把握し

ていた。徹定は金嘉穂写本と原本の交換を請い、金嘉穂写本を版刻の版下として使用したいと申し出たが、金嘉穂は序文はともかくも本文版下に草卒の写本を使用することは謝絶した。また徹定は列強の進出への対応策を問い、金嘉穂は不買運動を以て回答した。日清関係についても言及した。徹定から金嘉穂に餞別の金銭が贈られた(41オ～45ウ)。

正月十七日には書翰の往復があり、徹定は借覧中の『翻訳名義集』とともに金嘉穂写本『釈教正謬再破』を返却して、九月の再会までに同書を定稿とすることを期し、「釈教正謬再破序」の字句について質問し、併せて送別詩一首を贈った(46ウ～47ウ)。

六見時(正月二十二日)は発程を控えた短時間であったためか、徹定の送別詩に次韻した金嘉穂の七絶一首のみが残されている(48オ・ウ)。

以上、摘要した通り、本書は徹定が自著と架蔵する古写経への序跋を請い、金嘉穂がそれに応えて撰文した文章が多く収録され、その応酬に学術的に見るべき内容があり、日本文人の腕試しに類する筆談録とは異なる。かつその序跋が古写経卷末など各資料に分散していて、今日閲覧困難な状況にあるため、資料的にも意義のある内容といえる¹¹。また、日清修好条規締結(明治四年九月)以前の来日中国人にかかわる記録は少なく、明治最初期の日中交流史料としても貴重である。ここに翻刻し

て紹介する所以である。

注

(1) 神田喜一郎の「幕末から明治にかけて同寺(知恩院)に住した養鷗徹定という学僧が蒐集したもので、明治のはじめ、中国から来た金嘉穂という人に見せたところから特に中国の学者の間で喧しくなった」(『古写経のはなし』『墨林間話』、一九七七、岩波書店、二〇〇頁)という言及は、『菩薩処胎経』の評価者として金嘉穂をとり上げている点で貴重であるが、帰国後の金嘉穂が『菩薩処胎経』を喧伝したことは管見のかぎり資料がなく、後年の公使館員(何如璋・張斯桂)の跋文揮毫と金嘉穂による評価との関係も未詳。

(2) 金嘉穂に関する資料としては、岡田篁所『滬呉日記』(一八九一)に屢々言及があり、佐藤楚材『牧山楼詩鈔』(二巻、一八八九)への加評が知られ、森槐南『槐南集』(『江楼夜坐懷金邵』一八七二作、「送王琴仙還清国、兼懷金幽懷葉松石二子」一八七八作)や張徳彝『帰途記』(同治十年十一月二日の条、『随使法国記』所収、一九八二)にもその名が見える。また中川柳外『支那三百画家伝』

(一九二五、四一―二頁)に立項され、阪本蘋園「明治初年の詩壇概況」(『東華』一集、一九二八・八)や『名古屋市史』にその名古屋での活動が言及され、尾張藩での授業生に森槐南・奥田抱生・永阪石埭・水野大路らがいたことが知られている。著述には、『泉志校誤』(清・徐士愷輯『觀自得齋叢書』所収)がある。一方、「幕末維新の仏教界管見」(『古経堂詩文鈔』別冊、三三頁、徹定上人遺文集刊行会、一九七七)では、「金嘉穂と金邵の両氏がいかなる経歴の持ち主であるか詳らかでない」とし、その後の「知恩院の仏教美術」(一九九〇、京都国立博物館編・知恩院発行)の列品解説でも、徹定収集にかかる古写経の跋者として金邵と金嘉穂の両表記が見られ、同一人物と認識していないごくである。『支那三百画家伝』に來日当時二十七、八歳とするのは、信据しがたい。

(3) 徹定の伝記については、寺本哲栄編『徹定上人』(総本山知恩院、一九九〇)、牧田諦亮「徹定上人の生涯」(『仏教文化研究』三六、一九九一、一三―二七頁)、木本弘昭「徹定上人年譜稿(増訂)」(同上、九三―一二七頁)等を参照。徹定の耶蘇教批判としては『釈教正謬初破・再破』が知られ、藤堂恭俊「幕末維新の仏教学管見」(『古経堂詩文鈔』別冊、徹定上人遺文集刊行会、一九七七)、池田英俊「近代排仏思想における仏教側の反駁」(『印度哲学仏教

- 学』一三、一九九八・一〇）、芹川博通の諸論（『芹川博通著作集四』北樹出版、二〇〇七に集める）等の諸論がある。徹定の仏経文献研究としては、『鬮山所蔵古本搜索録』（一八五二）、『古経搜索録』二卷（神田喜一郎旧蔵、一九七三影印）、『古経題跋』（一八六三序、明治初期木活刊、のち『解題叢書』所収）がある。
- (4) 木本弘昭「徹定上人年譜稿（増訂）」（『仏教文化研究』三六、一〇一頁、一九九二）では、明治三年十一月に「山口に伝法道場開かれ、大僧正に代って伝灯師を勤める。受者廿四人名、檀林外の付法の始めである。」とあり、そのあと、明治三年十二月から翌年春までの数ヶ月の記事が空白になっていて長崎滞在自体が記されていない。
- (5) 相馬崇禪（一八二九〜一八八八）については、藤堂恭俊「幕末維新の仏教界管見」（『古経堂詩文鈔』別冊、五九〜六一頁、徹定上人遺文集刊行会、一九七七）を参照。
- (6) 合刻本『釈教正謬初破并再破』（一八七三、三縁山蔵版、所見は無窮会平沼文庫第二・四九八三）には、金嘉穂の自書を刻した両跋が冠されており、行詰・字詰のほか、徹定が質問したとおりの別体字が確認できる。
- (7) 古賀十二郎『長崎画史彙伝』（一九八三）には、金那が「鉄翁禪師を春徳寺に訪ねて筆談を試みた」とあるものの、徹定との筆談は従来知られていない。
- (8) 『菩薩処胎経』五巻は、首尾二巻を除く三巻が、西魏・大統十六年（五五〇）に陶忸虎等の発願によって書写された一切経の一部であり（首巻は平安後期写、末巻は奈良朝写とされる）、京都浄土宗大本山知恩院の所蔵にかかり、国宝に指定され現在は京都国立博物館に寄託されている。二十世紀初めに敦煌・トルファンなどから発見された大量の文献が世に知られる以前、本書は最古の書写された漢字文献と目され、その楷書成立以前の隷書の筆意を含んだ書体が、明治期の日中文人に貴重視された。
- (9) 林雲達は、幕末に長崎に来航して英館に滞在中に九州探索中の三島中洲と筆談を交わしたり（『瓊浦筆談』一八六二、学校法人二松学舎所蔵）、明治期にはいつてもしばしば長崎に来航して中林梧竹が従学したことなどが知られている。馮鏡如のことは『支那三百画家伝』（一九二五）に簡単な記述がある。
- (10) 徹定旧蔵にかかる『新訳華嚴経音義私記』（個人蔵、汲古書院、一九七八影印）の巻末に、徹定の跋に次いで金嘉穂の三種の跋が残されていることから、彼らの再会が果たされたことを知る。第一の跋のなかでは、『新訳華嚴経音義私記』の筆法が欧陽詢「道因碑」に似て、書体は北朝で使用された北魏以来の別体字が多く、「菩薩処胎経」とも似ること、また則天文字を使用することから、唐写本であ

ると審定している。第二の跋では、本書が玄応音義と並んで、佚文を多く引用している文献の価値を述べる。第三跋では、北朝別体字は漢魏の隸書体から変化したものであり、中国では隋唐期に（特に唐太宗が王羲之を愛好したために）失われたが、日本では古い書体を用いたので、その源流を知ることができるとして、日本古写本の価値を総括している。

(11) 藤堂恭俊「幕末維新の仏教界管見」(『古経堂詩文鈔』別冊、三三頁、徹定上人遺文集刊行会、一九七七)によれば、金嘉穂の跋は、『菩薩処胎経』卷二・卷三、『大楼炭経』卷三、『海龍王経』卷四、『統華嚴疏』十三、『時非時経』卷末、『仏頂尊勝陀羅尼』、『十地経論』、『華嚴経音義』卷下の九種が残るようである。中田勇次郎「日本に請来された古写経」(『中田勇次郎著作集』五、一九八五、二玄社)も参照のこと。

翻刻

(凡例) 漢字は基本的に印刷標準字体を使用した。原本は朱筆の「。」で句読を切り、返点送仮名を添えているが、翻刻にあ

たり句読は必ずしも原本に従わず、また「、」「。」を用いた。文のまとまりを示すために、適宜、空行を設けた。各丁表裏の末尾に、第一丁表を「一ウ」の様に示した。碑刻体と楷書体など、漢字の字体の異同を問題にして「A作B」のように言及している箇所については、(図何)として、後に該当箇所の図版を掲げて本文を示した。

瓊浦筆談

庚午臘月念四日、訪春徳寺鐵翁禪師、賦呈。

松翁道人録

唐有貫休宋惠崇 君能繼躅現神通 丹青入妙參禪力
南北分宗絶代功 胸裡江山堪避俗 毫端雲霧似談空
今人不媿古人意 天下風流属鉄公(一オ)

鉄翁禪師見示清人金邠詩、曰、邠蘇州人、善文好画、頗有名士也。蓋応尾州藩之聘云。因卒然賦一絶以贈。

堪感因縁到处生 日觀峰下識君名 鉄翁為我慇懃説
二十八言金石声

博一粲。若有閑、伏祈貴臨。松翁

忽辱詩来、読悉歡喜(一ウ)、寵招本不当辞。但今日有事、兼之泥塗、須明晨当走見耳。手此奉復松翁禪師。金邠

○念八初見

剩寒栗烈、清標万福、至慶。初接鳳眉、不任抃躍之至。賦以紀喜。

海外相逢豈偶然 西來東去有因緣 風(2才) 帆縮得三千里
不是天仙是地仙

伏乞正。松翁

先生号為何。

拙号只邠一字。

大兄書画、一二紙賜之。

今晨起来、喜兄筆札相訪。因為二詩俟、写出奉覽。深蒙雅意、殷々当不辭耳(2ウ)。

見惠玉作、一生之曠慶也。願押印。

弟同赤松来貴土、本住泉屋寓店、今移来此唐山友処、印等尚未搬来。少停、便要去搬。故印須明日方有也。貴寺奉謁、印带来、如何。

諾。聞善画、請一揮。

此間之紙不宜墨。恐不好奈何(3才)。

拙著积教正謬初破二卷、乞電覽。文章極拙劣。若下筆改竄是幸。貴国耶蘇之禁、如何。

三教並立、儒為上、积道次之。儒以治国安民修身齐家。积以養性明心。道今且不論。积迦出天竺、未聞中国堯舜周孔之学、自以其学闡揚一方。要之、勸人向善則一也。神力广大經典所言、今之為积学者未聞也(3ウ)。余向亦略涉仏書、即如法苑珠林

所引之事、何一非勸人修善耶。成仏作祖之說、功夫到此時、或有所得。非一從积氏、即能生蓮花世界。耶蘇出於西洋人、其說多不經、中国亦無人看他之書、支離牽纏不辨可明。我聞儒积道三教、未聞可添入耶蘇為四教也。积氏書所見如楞嚴金剛華嚴法華諸部、皆有精義。耶蘇之說、能如是否耶(4才)。佞仏則福、關仏則有禍、此积子謀生之說。学道者学其道、不必謀其道之外。耶蘇母乃独謀其外而遺其道之中乎。耶蘇之非、固不必關而知之審矣。

余旧作有金剛經序、誦法苑珠林五古三首、惜稿不在此。他日奉覽可也。

高妙論感服。余關耶蘇、固不得已耳(4ウ)。

大抵仏氏之所言、皆鑿々可信。如天竺古翻身毒、在唐山其音相同、取漢書可証也。耶蘇之說、天主為一小兒婦人、又是何人誘人之說、知者難信矣。

大兄詩文集、既行世否。

拙稿尚未編収、但存草本耳。杞憂道人、亦是尊師号否。僕不知此書、当細讀再言(5才)。

杞憂、拙別号。

博雅。

不慧有好古癖。収藏古經数卷携之、以請諸君鑑定。藏經二卷的、是支那古物希見之宝笈也。

乞一跋(5ウ)。

此經是主宝、不能草率了事。可好留此二三日、当鄭重念命。仏語当前要須凝神恭敬也。

貴国緇門之大德、今為誰。

今蘇州有鑑中、衡峯、潤堂、亦不過詩書画琴諸事。大暢宗風、当頭棒喝、未逢其人。

今夏伝聞天津上海之變。然否（6才）。

上海了無所事、伝聞之訛言。天津西洋人鬧事、亦以定矣。今仍如故。

貴寺藏經、必多有翻訳名義集否。

在藏中。

可能借出否。

諾。

僕有此書。是五百年前梵本。此書唐山亦少。中缺兩三卷、擬欲

写補耳。

余藏梵漢対訳尊勝陀羅尼一卷（6ウ）、亦古經也。此不携来。

異日若有抵東京、欲供高覽。

屢辱見招、因初来貴土、路徑未知、又因歲尽俗事紛擾之故、今蒙光臨甚喜。

題詩

不識栖禪地 翻勞訪姓名 拈華同一咲 対石話三生
饒舌因頑鉄 投詩媿報瓊 携琴来大海 何似法舟輕（7才）
旧是清涼衆 今為震旦人 名留居士伝 不現宰官身

梵筵時相看 禪宗漸種因 未曾經一棒 恐惹阿師瞋
松翁禪兄日本之大德也。屢辱訪尋枉過旅舎。因呈二詩。金邠

画蘭竹

松翁禪兄属画、因紙脆弱不勝墨、無足觀也（7ウ）。

深辱交誼之篤、再会期他日。

余在此尚可住半月、聆教有日也。

○辛未正月初三日 再見

釈教正謬初破序成、又菩薩処胎經、樓炭經、海龍王經跋成。

得名文、古經生輝光。謝々。

希世之珍也。故不敢辞耳。

先生年為何歳（8才）。

今卅八矣。

携門人来耶。

随貴国赤松氏、一人独来。

先生二親、名為何。

字詩庭。皆棄養矣。

有細君耶。

在家郷。弟本游人、故在上海。

貴国帝都文人、最傑出者為誰（8ウ）。

現在名重甚多。或官游、或家居、不能尽悉。有何子貞、名紹基

者。年将八十、致仕、名声甚重、現在蘇州。

友人中最親者為誰。

一 姓顧、蘇州人、專為鑑藏宋元名蹟。

一 姓凌、湖州人、專為學問詩文。

一 姓施、吳江人、為詩文。

一 僧号虚谷、揚州人、能詩善書画（9才）。

餘有去世者、有久不通音問者。

聞兄応尾州藩之聘。藩有水野姓彦三郎名、中川姓佐仲名者、

余知己也。若通謁、請致意。

海外知交、本以得見為幸。但此來漆黒前途無所知。訊人又不得

細言耳。

当寺現住鳳道、隱居忍海、及余弟子等、各乞書画一幅（9

ウ）。

諾。

馮鏡如、今尚在寓耶。

此広東人、与弊居隔四五百里、未相識。

林雲逵、亦然耶。

此二人皆同其名。林係福建人、亦數千里也。

同寮中、有文人耶。

亦有人、各專各學。復不大多耳。

西湖絶景人所知也。定当有高作（10才）。

今已兵火殘毀、可惜耳。

蘇州寒山寺尚存耶。

亦是庚申年、兵火毀尽。弊居与寒山寺相望。

蘇州与揚州、相距幾里。

千里。

暇日請觀讀法苑珠林詩、及楞嚴經序。

只僅三首、依儒者之言而發。暇日枉顧奉政（10ウ）耳。

日本古写經、供覽觀。就中時非時經、女筆也。

觀三經、宛然唐写、此女筆卷逼肖。

携歸賜短跋、万幸。

諾。

洋酒二壺、一甘一辛、宜飲尽耳。

感（11才）。題古卷、此唐山紙不佳。用日本紙棟硬者、宛然藏

經紙也。

明日可賚紙。

要借觀翻訳名義集。

初卷缺、明日可整理供覽。

支那本經、貴国竟全行翻刻耶。

既刻。

藏經等、明日送下可也。因不勝携取（11ウ）。

积教正謬初破序

儒以治身、积以治心。大哉、我中夏之王言、誠為万禩不易之

論、懸日月而常新者。是以三教鼎立、德垂終古、与乾坤同其永固、与嶽淵同其高深。今乃有泰西管窺曲學之輩、未窺大藏、未識宗門、專以矜其私智、乃敢著書立說、命曰釈教正謬、以攻仏經、以張大其耶穌之教（12才）。曷異蚍蜉撼樹螳臂當車乎。不自量其力之大小、竟欲搖動須弥山。多見其為妄人而已矣。夫耶穌何人哉、天主何人哉。彼土相伝、亦不過駕誣鑿空之說。其書雖流入我朝与日下、觀者無人。蓋不必好學深思之士、始知其罔。固人々皆知而一覽拋棄耳。彼（12ウ）猶欲流伝、足以見其愚而已矣。日下高僧杞憂道人、觀其書有憂心焉。乃慨然而嘆、蹶然而興。運衛道之神通力、出破妄之長舌、作為此書、以破其說。誠恐日下之僧人、或有染其邪說者、遂枝節々而博辯明析之、以祈勿習於紫色龍聲。蓋須弥山誠不可搖動、而自詡能挾泰山以超北海。或有信其虛矯者、夫三（13才）教鼎立、豈容益而為四。彼說苟善、亦胡不可依傳而行。今乃計弗出此、而欲奪釈迦之席、愚哉愚哉。其愚如是。其極其千古之大愚乎。彼嘗見關仏乎、關者自關、仏固自若也。孟子曰、能言拒楊墨者、聖人之徒也。今道人能言拒泰西、真釈迦之徒矣。為龍為象、為釈教干城、其（13ウ）力為何如、吾欽其人矣。永保堅固身、為海東護法、大力威行、見蚍蜉螳臂之輩、立見摧滅而已矣。慧日高臨、沸星出現、浮雲奚足翳哉。

同治九年除夜、中夏尊古自牧居士金嘉穗造序。□□
 繼觀作者序、皆題下号而不名、則序儻以入集、亦可將姓名刪

去、但題尊（14才）古自牧居士可也。

樓炭經跋

右樓炭經第二卷、唐咸亨三年蘇度節造。咸亨為高宗紀年。度節迺定方之子。仏嶺定公、据劉昫唐書、攷之詳矣。硬黃紙烏絲闌、製造精妙、唐藏經皆爾也。米海嶽嘗言、紙歷千年而壞。今此硬黃紙、堅韌如（14ウ）初、已將千箇年、雖經萬載、可以預。必豈冥漠中有龍神撓護邪。字体舒和腴潤、偏真唐法、蓋唐写經之最精者。敬為說偈、讚嘆曰、

一字一摩尼 粒々生光明 一紙一須弥 翻々歷万劫

中有真実義 甚深微妙法 能作慈悲航 徑渡華嚴海

能作法雨潤 灑滅乾毒燄 筆墨有精靈 千載生悲仰（15才）

東海湧祥光 希遇仏功德

同治十年元日、蘇州尊古自牧居士金嘉穗觀訖筆記。

海龍王經跋

右海龍王經第四卷、定公以大和法隆寺所藏大周長壽三年李元惠造法華經字体相同、定為一時所造。按長壽乃武后（15ウ）紀年。是年為壬辰、初改如意、繼改長壽者。武后牝雞司晨、革唐為周、則此仍当称唐藏經可也。細楷精嚴、有魏隋諸碑風度。硬黃紙烏絲闌、想見爾時、製造佳妙、千餘年之物、仍然如新、可不宝諸。小生航海万里、東游日本諸国、見海濤之奔騰海山之靈

奇、当為平生遠遊第一。識定公出視新著釈教正謬初破二卷、引經据典、淵博渾涵、亦為平生（16才）學問之交第一。定公又出視西魏寫造藏經一卷、並此長壽与咸亨中蘇慶節寫造唐藏經各一卷、復為平生所見奇蹟妙墨第一。自念平生之三第一、定公独占之。將置我於何等。豈儂本第二流耶。同治十年元旦之寅時寫記、於時曉鍾已動、東方未明（16ウ）。蘇州尊古自牧居士金嘉穂。□□

偶筆

冰寒於水生於水 青出於藍生於藍 弟子學師識斯義
不須隨衆称和南

破衣藏珠仏所説 千潭一月誰能參 談禪筆下元易々
不見紫瀾万物涵

物出從來見空人 声到耳辺耳向声 倘取滿月作旁証
円缺有無何様生（17才）

似過華嚴海 來從兜率游 莊園小天地 曾説芥為舟
一禽息六月 一虫鳴三秋 小大各得性 此亦逍遙游

我聞古聖云 常存平且氣 清明而無為 仏性倘如是（17ウ）

弟欲歸矣。奉擾香積、謝々。

林果野饈、聊備談笑之資耳。

荷々。

昨辱光臨、深蒙瞻顧、感謝無所措辭。実千歳之奇遇也。所惠高序并題跋、篇々琳瑯、何啻隋珠趙璧乎哉（18才）。定藏此卷有年、未曾有鑑定者、徒抱十和之嘆耳。今閱先生之鑑賞、古經為之生輝光、如有神物相助者。若夫釈教正謬初破、持論雄壯、立意卓越、一言下压倒邪説、如颺風墜籜、復何愉快也。此序一出、令人決千歳之疑似、可不謂一大善功德哉（18ウ）。昨所約日本古寫經五卷、奉供清玩、各賜一跋是幸。屢勞玉手、厚顔之責、無所逃。不腆之謝儀、聊表寸忱、只欲充潤筆之資耳。莞留是祈。匆々頓首。王正月初四日
金嘉穂先生悟下

前辱厚貽、昨又奉擾香積、已屬非分。今又（19才）承潤筆之賜、斷不敢當、謹仍返璧。天雨不克趨謁丈室、又兼道路不悉、且停日再作良晤。藏經翻訊名義集俱到。西魏經跋紙、若送來之式、弟処皆有似乎。太薄輒、接入与本經不称耶。專此奉啓并請。道安。新正四日復、金嘉穂啓上
松翁尊師 侍者（19ウ）

美濃紙、雁皮紙、孰為佳。

此薄紙佳。或写好、再倩裱工、裱厚裝入古經、亦可耳。

序跋中古文字、二三請示其義耶。

(圖2) 即奪之正字。儂吳人自称、似出方言。韌堅而柔也。古

經疏或作刃勿。搗呵護之意(20才)。

此經後無紙。可能接上一紙、當重寫年。

待明日、當賚送。

我向詩禪知頓漸 師從頓漸悟詩禪 浪萍風絮相逢

尚記詩家兜率天

維摩丈室坐斯須 相對談言只是書 香馥金爐清韻動

道人正是午參餘

尊古自牧居士吟贈古經堂定公、時庚午除夜(20ウ)。

次韵金嘉穗見示

相訪同吟榻 論談不壳名 言々皆錦繡 字々悉瑤瓊

貶小維摩詰 探玄竺道生 偶逢知己友 自喜一身輕

吾是東瀛客 君為上国人 豈囟同筆硯 相會話心身

鴻爪無留跡 絮花有結因 清談臻妙理 忝止毒龍瞋

乞政(21才)

謹啓、新晴如洗、漸覺暖和。龍標福履吉祥、主祝々々。所

命西魏經卷尾接紙、裱工極拙奈之何。只希望一揮玉毫耳。

他囑雜僧、勿々布字。松翁啓

金嘉穗先生悟下 新正月初五日

藏經已到、當即書之。新晴聞鳥声多、喜想(21ウ)法座亦同之

也。俟寫畢、当趣晤。尊師文筆極簡勁蒼古、弟慕之。有文集、

可賜讀否。此并請、附上詩文拙稿兩本。法苑珠林詩、金剛經

序、在其中。已籤出覽畢、賜印可、即賜返。

王正五日復、金嘉穗啓上

仏嶺定公暢禱

次金嘉穗大兄瑤韵

詩意禪情何必分 王草陶詩皆是禪 一悟惺(22才)々臻妙処

文人胸裡有諸天

次韵贈鉄公

默契金翁与鉄翁 批詩評画一窗同 笑為品字感奇遇

鼎坐梅花書屋中

又

世間塵事我何須 禪榻論心信乎書 自有篆煙呈瑞氣

空中結字異香餘(22ウ)

小沙弥乞書与之

為問達磨西來義 一花五葉至今開 一字不伝画壁坐

要知明鏡如非台

僧璨禪師本俗家 挹泥帶水過年華 五句已過方參悟

衣鉢檐当最足誇

昨辱手簡并尊稿二卷、瀏覽一過了。其詩則有陸劍南之体、灑落爛雅、奇巧驚人。其文則有大蘇之風、變化縱橫、不可端倪。就中讀無近名庵記、而見先生平(23才)日所居。又讀金剛序法苑詩、而見先生素心之所居。其所居既已若此、真可謂有道之士矣。定嘗謂蘇州之地、振古有豪傑士、多出于此。漢有四皓、晋有二陸、宋有范成大、有文衡山、僧則支道林、竺道生等輩出。所謂江山秀靈之氣所鍾也歟。今捧讀先生詩文、篇々压倒今古之豪傑、足以窺其道義所蘊(23ウ)蓄矣。古人云、目擊道存、先生即其人也。定何幸今得遇其人、窃以為天祐焉耳。總纏之餘、竟書鄙懷以贈之。時王正月初六日、梅花馥郁、黃鳥報春。仏嶺松翁道人拜啓

金嘉穂先生玉案下

附以二詩

前峯雪尽碧嶙峋 傑閣哦詩瓊浦春 風送清香尤快意

梅花開処对高人 (24才)

華客相逢海外春 語音雖別筆如神 此游足償生平志

執笏細評天下人

副啓。向命進鄙稿、定多不留稿、只信笔言志耳。然尚存者有兩三本、恨此不携来。但有客歲西游草一小冊、將須三五日、奉呈覽耳。

自牧齋中抄出省字、以備不忘。

笑嘗嘆麗婦罷(24ウ)橋養芙蓉夢張

難鄭氣流學命僕遷胸飛議猶窮

龕漢賓仏藏壳報懷過綠録鼎膺

牆蘇邁莊巖抔懸鳳辨覆(図3)

吾邦人不識文字者甚多、至奇(25才)字、尤不解其義、故問之耳。蓋古昔仏書疏中、有(図3)等字、亦省字也。貴邦有此例耶。

未詳其例。

邠啓白定公。連朝乞書画者麤集、日夜執筆応之、頗歷碌。兼又兩日天雨、不克趨叩丈室。劇相思想同之也。拙作呈覽、行期恐在元夕左右。屆期当辞謝。王正十日(25ウ)

○十一日三見

菩薩処胎経跋

大統為西魏文帝之紀元十六年、紀年為庚午。是歲乃東晋簡文帝即位之大宝元年、而高洋代東魏、称大齐之天保元年也。陶仲虎等其作経之人。乍即伍字。見敬史君碑。北朝墨蹟久絶、記録書画之籍、未見載入者。今此西魏蔵経猶存人間、誠絶無僅有之宝墨(26才)。小生何幸、乃於海東觀之。仏嶺定公有此真、可以压倒天下書画船。而此一千三百餘年之紙墨、猶然堅牢整齐、無敝渝之患、定当寿等須弥山、在々有龍神呵護保守。爰為細校。経中之字、如惣作惣、偏作徧、膝作膝、槃作槃、邊作邊、華作

華、幡作幡、癡作癡、寂作寂、濕作濕、色作色、鬼作鬼、打作打、刹作刹、過作過、痛作痛、牙作牙、匹作匹、疆作疆、脩作脩、講作講（26ウ）、妒作妒、儀作儀、惑作或、強作強、牽作牽、英作英、閻作閻、妻作妻、施作拖、旃作旃、厚作厚、求作求 旧校作求、譌。持作持、全作全、推作推、離作離、極作極、微作微、對作對、族作族、係作俟、憑作馮、律作律、夾作挾、佛作仏、陶作陶、搜作搜、昏作僭（図4）数字未詳。真北朝之字体、証以北朝諸碑、一々符合、而筆勢（27才）堅栗飛騰、頗極奇古、与北朝諸碑体亦偈肖。至於五言偈頌、率皆擠写、亦是古經旧式、唐宋諸經尚尔。至明支那撰述本、始改革為一例、非旧式矣。定公跋不即定為西魏、猶作疑辭。蓋公生長海東、未見北朝碑刻字体之故。茲小生為之據証奇字、援北朝碑刻而審言之、直指為西魏之藏經。了無纖芥可置疑喙矣。秘宝驚人、自処墨緣眼福、惟有瞻拜（27ウ）讚嘆、又何能措語詫奇邪。

同治十年上春、蘇州尊古自牧居士金嘉穗、將適尾州、行次長崎、觀訖審定、附墨經尾。□□

邠啓白古經堂定公。即日伏惟、禪定綏安、法履亨嘉、為頌。頃賜佳醞、媿顏拜登。衆藏題跋、悉已写就、並望指數。邠前呈五律、並為大衆書諸詩、雖信筆所成、未免敝帚自享（28才）、欲撰教篇入稿、却都不記憶。敬懇命侍者、錄一草稿見付。謹啓。

賜詩和成、奉覽。天誕日 邠 □

奉次元韵

山肩吟瘦骨嶙峋 何異幽禽喚好春 廿載萍飄頭欲白
梅花莫咲遠遊人

謝公贈飲一壺春 便有高歌動鬼神 公亦斯文真健者
相逢万里兩間人（28ウ）

古經堂定公印可 邠呈稿

古經堂定公、以新著釈經正謬初破、并西魏藏經一卷、唐人兩卷、日本五卷、皆千載以前物。喜遇墨緣古契、因呈二詩。

博引真淵雅 新書破謬成 名山留著述 釈教有干城

此亦破邪論 真同一哄平 大師非好辨 為鄣紫瀾橫 一卷之書、

必立之師。一哄之市、必立之平。漢書語也（29才）。」

西魏藏經在 千秋宝墨新 造書陶什虎 自愛鹿牛人
更有唐賢迹 兼羅海外珍 得觀凡八卷 作跋証前塵」

尊稿惠借、当熟読、五六日留之、允之耶。

如須遲延無不可。倘若同赤松氏啓行、便須賜還。

諾。今日開講華嚴原人論、頃刻就座、若有倦、則命侍者弁事。

諾（29ウ）。

先生好八分。請書南樓扁榜。一日瓊山第一樓。一日猶龍窟。
先生印面、古篆難読下。為以楷字示之。

一印 金躍躍日 閱防 一印 嘉穗私印 一印 邠滯穗

一印 喜采 同穂。説文楷字正体。一印 嘉采 一 邠懷々

方今文人中、開刻書籍、何為善耶。

湖海詩伝、湖海文伝（30才）。

詩伝既見、文伝未見。

文伝所載、皆學問之文。詩伝所選、皆正宗好詩。新地貨庫書店、却有店号德源。此店尚有數種。上人自撰書佳者、有用可也。此書中數百人、当唐山人文極盛之時、故議論皆佳。此亦數十年前刻成、其人皆五十年前人也。

先生善印刻、見集中。請賜鐫一二類（30ウ）邪否。

携歸作之。弟昨日買朱彝尊曝書亭集一部。

朱竹垞大家也。定未見其全集。請借覽。

詩文皆有共八十卷、恐一時觀之不尽。

觀兩三卷、是可也。

東坡居士曾留玉帶于徑山為寺鎮。今先生亦書説法苑珠林詩觀之、則永為（31才）吾仏嶺之宝鼎也。

法苑珠林詩、写在何処。

在机上。当齋昏以進送、暇日書示之。喫齋麵邪否。

他日来叩叨擾。今日過飽矣。弟道別欲返矣。前送上詩文稿各一本、可先賜下携歸。

第三第五、二卷返璧。

共留五冊、在丈室。近年之作、稍過於昔作、（31ウ）不必觀可也。

樂而觀之。

禪暇能過寓、筆談亦妙。必清晨沙弥来、約定。

諾。剋期十三日午後上堂。

○十三日四見

聞尾州行期在近日。恋々之情、不勝悵然。

昨日晤赤松、大約說、十九日啓行（32才）。

緩期大喜。

兩人之念、均如此。

定欲製書画小冊子、請一揮山水小景四君子之類。向所觀五律、請題二昏。前詩中休噴之一句、改案如何。余欲以此詩誇友人、故及之。呵々。

破邪論是現成典故、一時畏難無有对。故（32ウ）但字面論对其意。若曰不知者、以為好辨、属改当緩思耳。

定欲以本年九月帰錫于江戸、行次過尾州、倘再会彼地、亦為一場佳話。尾州建中寺吾宗之叢林也。余游彼地、則以此寺為

寓房。

寓房。

必須在尾州一会。弟萍踪無定之故。欽兄學問淵通、當為日本第一流也（33才）。

此元稹翻譯名義集、字画精好、唐山絕無之物。元刻明印、紙是明旧官牒。十四卷是真本。二十卷是支那分本、非也差矣。

為印本之冠、字々活動。

肯為我作一跋、取連四紙写出、是感是感。便聆禪兄發大議論也。

媿不文。

弟服禪兄文筆能語簡力勁。望勿謙允之(33ウ)為禱。

感媿吾不敢當。一兩日借覽如何。

諾。

此夾板木、為何。

此唐山香樟木。取其有香氣解蠱也。

在此筆墨極多、無文墨之人亦來請寫。兼有托相識招到家中、出十廿張紙索書。故此除文字相交外、於正月望日起、一例取潤

(34才)筆。況且赤松氏厚說、過在尾州、字画俱有潤筆。弟在

唐山、不大肯心人。写字刻定有潤筆。適岡田恒庵在此商

量、嫌旧定太貴、重為減定。禪兄是京都人、当知風土潤筆貴

廉。当若何、望示知。筆墨是細事。弟之意、原是在当取者、千

万不為貪。俗人也不当取者、一錢為貪矣。無奈煩極。俗人又不

知書畫貴重、貪得無足、不知感謝(34ウ)。故不得不如此。最

恨是不相識招去、逼住伏地写字。弟無棹椅、不慣費力之甚也。

岡田所減定之価、禪兄以為如何。

煩人之力、焉有不謝之理乎。只中人以下者不知礼、故或之

有。中人以上者、所不為也。岡田氏之說最好。

拙者釈教正謬再破、請覘高序。

諾。翻訳名義集、昏明官牒有二印。一曰広西等(35才)処按察

司印、一曰布政使司之印。牒自嘉靖六年至廿二年十二月、腦中有雕工沈礼、盛茂、楊子成、張子祥、姚得成、朱文只、來敬等也。

啓。寒威酷烈、伏惟尊履休美。向所命翻訳名義集跋、綴草

案、塵高覽、但恐不協尊意。句々改竄、實為甚幸。釈教正謬

再破高序、昏三張送上机下、序成賜下。明日枉駕敝寓如何。

野茗園蔬欲以開別筵。仰祈(35ウ)賁臨、勿々頓首。

王正上元日 松翁

松翁禪師法座天寒、伏惟法履万福。賜示翻訳名義集跋、極是。

并乞写入書後為禱。再破序昨已成、今以紙來、当重書之。再破

竟日夜執筆、在此写一副本。明日見招、今日不預定、或後日晤

談、欲写畢再破、一併奉復之故。前借名義集支那本、是貴寺大

藏、先奉呈、先徹二本、留三本。重刻少遲、如何。勿々奉復。

餘(36才)言晤悉此呈。 金郊啓上 王元日

貴国人山井鼎著、有七經孟子考文。此書曾覽否。

覽。

心經

此心經一卷、写者不留姓名、字体雄健秀逸、若唐人而出入北朝

者、仏嶺定公梵篋之秘宝也。以経昏揆之、当亦千載以上之物矣。珍重（36ウ）珍重。同治十年人日、蘇州尊古自牧居士金嘉穂識 □

華嚴経跋

菅公屑蘇代羅、写華嚴、是如何願力、如何精進。精楷一筆不懈、是如何智慧、如何神通。後來者倘於筆下參悟、即便可得沔陀沔果。斯經之宝貴靈通、可不待言。仏嶺定公出以觀視、敬為留墨、以結古蹟仏縁（37才）。

時非時経跋

右時非時経跋一卷、日本藤原后手写、仏嶺定公所藏跋語詳矣。字体精楷、蹇騰飛翥、如鳳立朝陽鶴翔雲漢、精妙絕倫。尾附誓願之言、文体亦蒼古、若唐人手筆。海東后妃、而善文字、乃若此。可不敬仰晞慕。据清宮秀堅新撰年表、天平十二年乃唐開元之廿八年、到今已一千一百卅有二年矣。紙仍堅仞如新、不異唐硬黄（37ウ）紙。綦難宝之、当若何身。得見此真、海外古墨之縁第一也。敢弗以誌。同治十年王正月、蘇州尊古自牧居士金嘉穂、時將発長崎適尾州。 □ □ □

続華嚴経疏跋

右続華嚴疏、日本高野大師書、細草如豆顆、宛有右軍風格。惜

僅此一卷、首尾俱闕、為可悵耳。夫古墨伝留、難必其全身、以得隴望蜀之（38才）心、管中窺豹之遇、々已幸矣。 □ □

啓、人日得晴、最為佳祥。龍標多福、祝々。念誦之餘暇、每日披読尊稿、繫節三嘆。只憾窺其一斑、尚隔鞞之想。所冀得窺全豹、愈為妙也。惠借是祈。洋酒一壺獻之示侍史下、聊伸令辰之賀耳。叱留孔幸不尽。 松翁啓（38ウ）

元槧梵本翻訳名義集

是書宋刻有細字本、明刻有支那撰述本、作廿卷者、皆方冊也。此梵本作十四卷、刻於定教寺、蓋元槧云。藏書家未有見者、已印本之僅存者矣。其紙迺明南京吏部考功清吏司官吏供結諸狀裁、而覆印者又有鈴広西等処按察司印、布政使司之印。兩印（39才）者、版旁有刻工、陸甯沈礼等卅一人姓名、今在腦中。亦沿宋槧田式也。得諸滬城、破碎已極、中又闕第八之十四卷。逐付工裱背完好、而写補足焉。尊古自牧居士記。此書當時上板貴重、精嚴之極。写人是張皇、善小楷、声名甚重。雕刻亦佳、手費万金、此亦刻書典故。不知者、聞之皆范然也（39ウ）。

書元槧翻訳名義集後

宋元槧本流传于世者、僅晨星耳。辛未初春、余游崎陽、初遇

金邠先生。々々有好古癖、与余同臭味。一日出阮元槧翻訳名義、曰、此刻唐山所罕觀也。余繙閱之、其本大冊、字画秀麗、刀法精緻、非尋常坊本之比。蓋元張皇所写云、頗有趙松雪（40才）之筆意。宜乎先生秘重之也。書中義作義、尊作尊（図5）、第作弟、譬作譬之類、尚存唐宋之遺体。又如細題編者名号、亦尊經之旧式也。於是余窃謂、此書匪啻綜括梵文之名義、至其論心意識陰入界之旨、尤足取信焉。清魏源嘗立阿耨達山及南瞻部洲之說、皆攷拠于此。其為大儒所重也若此。其昏乃用明嘉靖中官（40ウ）牒、往々捺印、記紀年。距今垂三百五十年、而得觀當時体裁、不亦奇乎。先生徵余跋。余辞以不文、先生不允。仍書之以贈。

明治四年辛未春王正月上元日、題於崎陽大音教寺南寓樓。日本武州仏嶺徹定薰沐和南。

○正月十六日（五見）

再破中略有可商者、已為增損數字、想録（41才）時尚有誤處。兩日夜写成。中有數處不解、故來証明。

副本尽美。所冀以此本賜余。々本為先生之咲種、如何。

無有不可者、敬從命。余之意、本欲他日返里時、誇示本國積子之故。并乞再賜初破一部、以防友朋伝觀或有借失之慮。余家藏書有此人、必羨慕。余得交海東好友、藏海東著（41ウ）述、豈非佳話。

喜出望外、只媿淺識寡聞耳。余亦欲以先生手写誇友人。呵々。

印刻精絶、頗有銅印体。飄逸奇古、尤可珍賞。無物謝之、奈之何。

卜卜写誤。弁辨省字。毛毛写誤（図6）。我々所仏語、我為我之意。地獄論、余未見為恨（42才）。

在寧都三魏文集中。

有一俗談。吾邦頻年西洋人、闖入都鄙、惟利是争。財用虛耗、不知攘夷之策略。如之何。

与中国相同。彼用火輪、來去甚便。此事當一時有一時之穢、宜在經濟者遠謀而已。余窃度之、恐以又柔之、尚有未能。唯當時防長慮每事禁遏、使能長逞其快意為宜。若一言以（42ウ）尽之、苟能使彼取商販之物不售、或是耗折、則彼自去。彼固以利為主、若無利、斷不營々。

確論服。貴国与敝邦、近年交際疎闊。更有親睦之方耶。

此事非在下之人所得揆度。曾聞在唐時兩邦極睦、唐太宗賜日本貢使婦作詩、有日下非殊域之句。即以此句觀之、亦可想見（43才）親睦之意。然此事我輩不在其位、可不言也。

愚意亦然。孟子云、行者必以驢。定拠古賢之遺意、聊表微忱、莫必辞。

却之為不恭。然受之有媿耳。莫辞。

禪師既引古義、諄々面命、亦可受之道（43ウ）。

別期在近、不勝眷々之情。不知陸行耶、海行耶。

昨日晤赤松氏、彼説須等大政官文書來。大約十六日可到。若十六日到、則十九日可啓行。若尚未到、又可遲五六日矣。是水行上火輪船到兵庫、復再有陸路也。

前日賜画、多謝々々。既有画、豈可無詩哉。汝煩揮毫（44才）。
釈教正謬再破廿二番、辛未正月十四十五兩日、手録副本竟。

副本筆法秀逸、付劄、如之何。

然寫尚未佳、中兼有誤處、望細校之。何不留此作底稿。仍是貴國人書之為是。或序文用拙寫為宜。因其中省筆之俗字太多、余貪抄寫之速、故為此。刻書無此例、未免貽笑大方。雖宋人刻書、有省筆俗字、略可引之為例。然宋刻精工者、仍不如（44ウ）是也。

健筆精好、迅速如神。感々。

余每事必引古以証、雖不佳之處、亦引古以証。此真好古而癖者、公亦好古之人、相對未免不一咲。平生癖於古、則差堪自信耳。

默契神交、一見如故。豈得不夙緣哉。

倘行期尚後、還可相叙也。

諸本類、明日携須返壁（45才）。

甚好。

釈教正謬再破序

杞憂道人為釈教正謬一破再破、言之若是諄々、則聽者不宜夢々而固當察々、苦口婆心、慎勿孤負。夫深山大沢、實生龍蛇、相安無害、曷為殲旃。若耶蘇之教、出於泰西、尊彼所聞、任之而已。乃逞其兇狡、來攻仏語、則若龍蛇之出而害人。戈矛從事固宜。道人頃摹（45ウ）初破成、以当戈矛、摹印而行。嘗為序之矣。今又成再破、重索弁語。讀其自序、已是窺見幽隱、禽賊先王、不翅大声疾呼。蒙更欲於何處立言、着仏頭之穢。雖然、不可無言以背道人晨鍾喚寐之意。至於其書之理確詞詳、廣羅群籍、以証其實而出精義、不肯自作言語、啓彼鑿空之誚、非博學閎覽、曷能若斯。下視泰西之憑臆私造、引耶蘇之書相較、奚翅虫鳴草間。不知（46才）首簡以上帝之命、毋許崇拜偶像一語、已是悖妄、非立言之體。我聞天體蕩々、天無言、天無視聽。天視自我民視、天聽自我民聽。上天之載、無聲無臭、不識何時命之極是戲劇、堪供道人之一噓耶。道人年垂六十、孳々矻々、晨夕執筆摹寫自言、我非浪費昏墨、實出於弗可得已者。
蘇州尊古自牧居士書於瓊浦旅舍。

再破未定稿、謬誤不少。故他日繕寫呈覽（46ウ）、尊寫本返壁。本年九月、定將過尾州。心事万縷、期再會之時耳。高序中有禽賊先王之語。請示其義。

禽即擒字正体。賊先禽王、杜工部出塞詩中句也。

昨大師以拙寫副本付刻。即是此意、非但謬誤、即拙寫脫文誤字、亦不少也。俟大作稿定後、到尾州、重寫為宜(47才)。承送行詩、多感。俟暇、奉呈政。

送金邠先生之尾州。松翁

花天酒地客中春 万里周游如比隣 半月訂交心莫逆

離情却勝故鄉人

邠啓仏嶺定公法座。昨日晤談極暢、奈彼此橫別緒於胸中、翻有欲語而不諸口者。又蒙贈金為贖、弟何敢當。承引孟子行者必以贖之文固請。故弟亦引却之為不恭(47ウ)而受之。是孟子令我受公之贖矣。感謝々々。赤松文書已到、大約是廿四五日啓行。

天意若是、容我遲緩、尚可再叙一兩次也。明日不暇、十九日必可相叙。或顧我、或奉訪禪房、皆可耳。元刻名義集、並拙寫再破、都領。草々奉復、不尽欲言。統俟後日面悉。十七日

○廿二日 六見。

奉次(48才) 松翁禪兄送別元韻。金邠具稿。□

此去前程浩蕩春 海天交誼德為隣 長崎山色雖難別

步々回頭別有人(48ウ)

書瓊浦筆談後

客歲九月、我仏眼山主徹定有防州之行、既而入淨宗學校、董都講之職、至冬十一月、伝灯弘通之式悉畢矣。至臈月、遂轉錫於崎陽大音寺、講華嚴原人論、輔教編等。香積之暇、偶与清客金嘉穗者、傾蓋相遇、以(49才)詩文唱和者若干篇。録以二卷、名曰瓊浦筆談。師今春投書於禪、附以彼二卷、囑曰、嘉穗博學多聞、旁涉仏書、而詩如劍南、文如大蘇、豈尋常騷人之所企及也哉。禪三復誦之、其詩澹雅而有裁雲縫霧之色、其文奇拔而有敲金戛玉之声、果如師之言也。就(49ウ)中有師嘗所著釈教正謬一破再破之序、持論確切、而闢耶蘇之意、与師之微衷宛如合一符、頗可謂鍼芥相殺者矣。其他諸経序跋及偈頌、一々渾成円熟、尽善尽美、是雖其才力膽識之所致、而自非深通禪理游刃有餘地者、安能有至於此耶。由是觀之、唐(50才)山文化之盛、固莫論焉、而仏日之未墜地亦可以知也。況於其人容貌性情皆可想像而見者乎。意師平生之懊惱一時氷解、而其客況之韻致不勝喜、亦宜矣哉。禪乃使筆工謄写一本、以供同盟諸君之電覽、敢請諸君辱賜佳評、則区々小冊子、亦當為之發(50ウ)大光明焉耳。是禪之所以欲為師軒冕於其文藻也。來書以正月二十八日發崎陽、以本月八日落於禪手、蓋以有火輪船之便也。古人曰、天涯如比隣、今也覺其言之不誣矣。復奚足憂鵬程九万之懸隔耶。明治辛未仲春旬有二日、走毫於蟠松窟之東堂。時碧桃(51才)始開、黃鸝求友。縁山後学崇禪識。(51ウ)

図版2

序跋中古文字二三請示其義耶。
 敎即棄之正字。儂吳人自称似出方言。韌堅而柔也。古經疏或作刃刃。撫呵護之意。

図版1・養鷗徹定録『瓊浦筆談』卷首
 (石川県白山市立松任図書館松本白華文庫所蔵)

瓊浦筆談
 松翁道人録
 庚午臘月念四日訪春徳寺鐵翁禪師賦呈。
 唐有貫休宋惠崇君能繼躡現神通丹青入妙參禪力南北分宗絕代功胸裡江山堪避俗毫端雲霧似談空令人不愧古人意天下風流屬鉄公。

図版3

自牧齋棗中抄出省字以備不忘。笑矣嘗嘗嘆嘆麗麗歸歸囉囉
 橋橋 養 養 芙蓉夫宮 夢夢 張張
 難難 鄭 鄭 氣氣 流 杯 李李 學
 命命 僕 僕 遠 迂 胸 背 飛 飛 託 託
 猶猶 狔 狔 龕 龕 漢 漢 賓 賓 冥 冥 佛
 伏 藏 成 賣 賣 根 根 懷 懷 過 過
 綠 錄 錄 縣 膺 膺 牆 牆 蔭 蔭 赤 赤 蓮 蓮 邁 邁
 莊 嚴 慶 慶 杯 懸 杯 懸 鳳 鳳 辦 辦 覆 覆 喪 喪
 吾 邦 人 不 識 文 字 者 甚 多 至 奇
 字尤不鮮其義故問之耳。蓋古佛書疏中有并并究々々々等字。急省字也。貴邦有此例耶。

小生何幸。乃於海東觀之。佛額定公有此真
 可以壓倒天下書。而此一十三百餘年
 之帝墨。猶然堅牢整齊。無敬淪之患。定當壽
 等須弥山。在在有龍神呵護保守。爰為細枕
 經中之字。如惣作想。偏作徧。膝作膝。骸作膝。
 邊作邊。華作茅。幡作幡。癡作廳。寂作家。濕作
 潔。色作色。鬼作鬼。打作打。刹作刹。過作過。痛
 作痛。牙作牙。匹作匹。疆作壇。脩作循。講作講。

離
 妒作姑。儀作儀。惑作或。強作強。牽作牽。英
 作英。閭作閭。妻作妻。施作施。搦作搦。厚
 作厚。求作求。舊校作持作持。全作全。推作推。
 離作離。極作極。微作微。對作對。族作族。係作
 侯。憑作憑。律作律。夾作夾。佛作佛。陶作陶。搜
 作搜。昏作昏。惟作惟。勢作勢。偏作偏。數作數。未詳。真北
 朝之字體。證以北朝諸碑。一一符合。而筆勢

図版 4

図版 5

之筆意。宜乎先生秘重之也。書中義作
 義。尊作尊。第作弟。譬作辟之類。尚存
 唐宋之遺體。又如細題編者名號。念尊

図版 6

卜。卜寫誤。弁辨省字。毛。毛寫誤。我。我所佛
 語。我為我之意。